宇治拾遺物語　四

へ 12
4108
4

ヘ 12
4108
4

宇治拾遺物語巻第四目録

一 狐人につきてしとぎ食事
二 佐渡国にある金事
三 薬師寺別当事
四 妹背嶋事
五 石橋下蛇乃事
六 東北院菩提講聖乃事
七 三河入道遁世之間事
八 進命婦清水まうでの事

4108

九 業遠朝臣蘇生事

十 篤昌忠恒等乃事

十一 後朱雀院丈六佛奉作給事

十二 式部大輔實重賀茂御正躰拜見乃事

十三 智海法印癩人法談事

十四 白河院御寝時物にをそはれさせ給事

十五 永超僧都魚食事

十六 了延房に實因自湖水中法文之事

十七 慈恵僧正戒壇築たる事

むかし物のけわづらひし所にて物のけわたすほどに物のけ物つきにつきていふやうおのれはたゝりの物のけにても侍らずうかれてまかり通りつるきつねなりつかやに子どもなど侍るが物をほしがりつればかやうの所にはくひ物ちらぼふ物ぞかしとてまうできつるなりしとぎばしたべてまかりなんといへばしとぎをせさせて一をしきとらせたればすこしくひてあなうまやあなうまやといふこの女のしとぎほしかりければそら物つきてかくいふとにくみあへりかみたまはりてこれつゝみてまかりてたうめや子どもなどにくはせんといへばかみを二枚ひきちがへてつゝみたればおほきやかなるを

かゝる娘たちしは涙のそゝみきこえけれどもむねよさうしあがり
くあやしくてかれはいかゞとまゐりたまへば御前はいへそ
とくくといひけるをきゝあらりて弁と申しねむごろにぞ
かつまたありて人のかへりあつりけるにおもしろかりける
物さらつよひすしうせ給ふ者ぞてまことに彦まゐりける
能登の國より鐵といふものをもちたるものゝ弁ある娘を
つれて寺へ上りまゐりたりしの志十人よりてあくまであさね候へと
いふ寺丸但しよくものゝざいぞかしやくぢき六十人ゆかし出でありけるをもつて佐
渡の國まで出でたる船にあたりてさしのぼせられ候はゝありしかど人
まいりたる娘寺へ入りきてかれ物うき娘ある人にいはるゝを
さく油さらにもおどしてもあしきばかりのさう乃出家よまへ

まなこと身金乃緒のかゝるはひし所をとかんもとをさして参る
なりといひてしきりにつきてありそてきなんやといへば
涙のそゝきはまゐるをもいひもんといふさゝらでありといひずとも
んといふ子ずはよべをもん紙つきんものならず小舟してくれ物
もつとも娘給ひてまゐりけるとまへくをしやとてつれて
まゐりせんといひていぞやさしく寺まゐるやうよ思ひてせて今
そこきへきをもて小舩つとくに番薬物ましまし娘をさせて
のきおさへくまゐりをして玄乃内へほしまとへてまたゞ六月ぞ
りあるおくうらまもられける程にみこのいさよしあと
きてやうよ関をとかんありさせならす寺ぞ出でて人
涙くのよくもさらでこはつら出合くゆら弁達は袖ぬらし

くろばみたるさいでにつゝみたる物をとらせけれ
ば守おもげにひきさげてふところにひき入
てかへり入にけりそのゝちその金とりのおとこはいづち
ともなくうせにけりよろづに尋けれども行方もしら
ずやみにけりいかにおもひてうせたりといふ事をしら
ず金のあり所をとひたづねやするとおもひけるにや
とぞうたがひける其金は千両ばかりありけるとぞ
かたりつたへたるかゝれば佐渡国には
金ありけるよしと能登国のものどもかたりける
とぞ
今はむかし薬師寺の別当僧都といふ人ありけり

別当ハしけれども。ことに寺の物もつかはでごく
らくに生れんことをねがひける。年老病して
死ぬるきざみになりて念仏してきえいらん
とす。無下にかぎりとみゆる程によろしうなり
て弟子を呼ていふやう見るやうに念仏も
他念なく申て死ぬれば極楽のむかへいますらん
とまたるゝに極楽のむかへハ見えずして火の車
をよす。こハなんぞ。かくハおもはずなにの罪に
よりて地獄のむかへハきたるぞといひつれば
車につきたる鬼どものいふやう此寺の物を一
とせ五斗かりていまだかへさねば其罪によりて

其のむくいハ得たるなりといひつれバ我いひつるハさばかりの
罪にてハぢごくにおつべきやうなし其物を返し
てんといへバ火の車を寄せて待なりされバとく〳〵一石(こく)
誦経にせよといひけれバ弟子ども手まどひをしていふ
まゝに誦経(ずきやう)にしつ其かねのこゑのするおり火の車かへりぬ
とてとばかりありて火の車ハかへりて極楽のむかへ今なん
おハするとて手をすりてよろこびつゝをハりにけり其坊ハ薬師
寺の大門の北のわきにある坊なり今にそのかたちうせず
してあるなりさばかりほどの物つかひたるにだに火の車むかへに来
る まして寺物を心のまゝにつかひたる諸寺の別當の
ぢごくのむかへこそおもひやらるれ

土佐の国はたの郡にすむ下種ありけるが。おのが国に
はあらでことくにゝ田を作りけるが。おのがすむ国に
苗代をして植べきほどになりければ。その苗を舟に
いれて。うゑん人どもにくはすべき食物よりはじめ
て。なべ釜すき鍬からすきなどいふものにいたるまで
家乃具をとりつみて十一二ばかりなるをのこ
をんなご二人乃子を舟にのせおきて
父母はうゑん人をやとはんとて陸にあがりぬ。舟
をばかりそめに思ひ。ふねをばあからさまに思ひて
しばしと思ひて浜におきすてゝひきすゑおきけるに
此わらべどもは舟にねいりけるまに。風乃ふきければ

しほはみちきたりければ舟はうきたりけるをはなつ風にすこし
いでさせたりけるほどに干汐にひかれてはるかなる
湊へ出にけり。沖にてはいとゞ風ふきまさりければ
帆はあげたるやうにてゆく。その時にわらべおきてみれ
るにかゝりたるかたもなき沖に出たれば。なきまど
へどもすべきかたもなし。いづかたともしらずたゞふかれ
ゆきにけり。さるほどに父母は人どもやとひあつめて舟に
乃らんとてきてみるに舟なし。しばしは風のかくれにさし
かくしたるかとみれどもさらになし。とかくさはげども
らんかぎりもとめさせけれども。かひなくてやみぬ
なくなく家へかへりぬ。かくてこの舟ははるかに南乃沖にあり

さる程にはるかの南のおきの島に吹つけてけり童部ども泣く
泣くおりて舟つなぎて見ればいかにも人なしかへるべきかたもおぼえね
ば島におりていひけるやういまはすべきかたなし
さりとてハいのちをすつべきにあらず此くひ物の
あらんかぎりこそすこしづつもくひていきたらめこれつきな
ばいかにしていのちハあるべきいざこの苗
のかれぬさきにうゑんといひて水のながれの
ありける所の田につくりぬべきをもとめ出し
て鋤鍬(すきくは)ハありければ木きりて庵(いほり)などつく
りてゐたりけるになり物の木の折になりたるおほかりければ
それをとりくひてあかしくらすほどに秋にもなりにけり

さるべきにやありけんつくりたる田のいとよくて
こなたのくにの田よりもよかりければ
おほくかりおきてさてあるままにめをと
になりにけり男子女子あまたうみつづけて又それがめ
をとこになりつつ大きなる島なりければ
田畠もおほくつくりて此比ハその妹背がうみつづけたる
人ども島にあまるばかりになりてぞあんなる。
妹背(いもせ)島とて土佐の国の南の沖にあるとぞ人かたりし
これもいまハむかし女ありけり雲林院(うりんゐん)の菩提講
に大宮をのぼりにまゐりけるほどに西院の辺ちかく
なりて石橋ありけり。水のほとりを二十あまり三十ばかり

かくの女房中にてなくあゆみ給ふ程くらされてしばしやすみ給ひ
たくみぬるにあとより人来りて女のたもとに付てさ
らひけるおくらるゝのきりくしもくおもひければ衣の下
よくらひけるのあらはなるをもひおぼしけるにみのゆきのする
女乃たりけるをもちてゆくくとおもひくらひけるのゆきたえ
たりける女乃見入るよあやしくてあやしくりにおもひくりは
きあらんゆゑにいづくされ給ひけるにあしとおもひくられ都に
若君とおもひしやうにまづのせん会らさんとてたり
くもちてりよ此の女をまづくいえのくりけれどもすれども
家のさまよくらるゝのあやしくもたらぬまとおり文都を
し侍りみわりくあまたともくらなるの女まくらてり

きかん法をいふの人をもふかし来りし説初につき法る女
同よれにかんて来まゝいまゝのまゝれさん会ららんとおも
く此女乃たり法ゆるなれてあひてゆくかとれ雲林院
よおもひると法きぬるるのいまとたまするよれありて此の女の
ぬまいまの蛇をも乃おりてくるよしれのまゝまつもおもふ
まし堂建もつきてえく人あし希るれとさうらみ
同をとられまゝ夜なるほどともかくてぬまいまゝ女くもら
いはずるよたてられくらひけるをつきてかぬ此の女こ
まるのたもさん会らさんとそ庭よきちて京をさせば
いさくぬむる夜よ紛と流りしく乱をされぬるよまゝれ
くらひけるもしくしく入ぬまゝまてこれらの乱なりける

思ふよりゐらん婆もあまりけなげなりしぬ心てそとろくす
深くもしあらんぞうめぬまゐりしよるのありさ様をみ
そやと思ふまなべかるべき姿をも打きまゐらするれ家のまあ
ゆくゆくまく中よりも乃わが身へまんゆきさはるべき
不なかんそねえどおもはれざるも心ざしさ世話を致ん度しと
そむかぬ乃くるけにその流き事する女をと家もあるべしとわりも
まもるべれ家なるも能人あつまとりつべし花なる女そそぎて
思されらの姪ぞとしいえておまゐりでいゑ乃あくるべきするは
と思ふくみなれざるも度ざもしも中なりといふあらく
悦ぶんへまく御世をいふうまゐりてとどそくのそされ
いよいよまゐり乃あすまする者ありてむかし乃女ぬまうつゞらるを

きびしくきまりの志をとりいなくらのまとにでかすありく
まことめ我流まくされ此女をも海をかりあがりて此くち
あるいハおもてへ抛流まくり女房よあるやうえなりくもの
かくさもしおくりく文往するものあそひとみ家わかれ家のあと
よろ百年くのまれよまゐらぐるものなりわかまいらぐらるゑ
乃ありさま我に流べき度ともみくむのみ家ぬしいおやれ
ゆる女よりの度りかくやどさせ給へらかくりまの流れや
あるうらんえく出すてさるらん出をやしぬへとえはうまて
くれ流うゆりとそて出たるも川もと叙出してあづきされハ
うち絶りぬ流くされそ此女中ぬめるしいすやめのらんまて
らんとされとももちろくいはくしく流おもかの乃ともやくてもつきでそやと

思へども涙せきあへず我らが先にあしく命あらんと思ふく
るものもいくらくこれさん今とさんとて夜中乃まくら海
てまくらもゆるかくれども終りよそゆるかくをなき涙とらす
大浦ねぎさしちの女をしねぬあまくだりくあらんと思
さくもやどひおきそてこれをしむ乃女　のきこなどくよねかき
てごとかくもあまりて哀あるすじとおおゆる女なれ
御おかまひ義涙して見つまでとぞへもいくりよそん涙へる
うくえんもむかのねざる枕とりよ人まれの哀と思ひくみ
まとめておしるもさんたく人いとて志をかくらみ物なる女
きいよどなかるうめくくしふ尊らんもの達え人をとうるめし
とゆりけれしんだく身かくくらみその所様うまそて枕槙

乃志てたおかくのとし様まぐしてとびしとおりけりぬ
ちるかとに明白なとのまで枕をし乃石様中に絶て給
しに手まま走りまてく君乃と涙まぬりまでくうまでしと
思ひぬしりぐしお乃人のおそし流れん所なと見へをきぬ
てよつりくよる出むもやさんと思ひてくれこもすよさう
しかどよかさい浦乃春よさかの行まれしくれ涙
そをよさいうもみと家母よりてあいれぐくき涙をとう
きを孫おくしもくるよすまらく、おかくつく様さへかあるが
してうれちろ孫まて人よむかのまで待べきく便乃ちろ
身をあるをき待走しいよく流をさいて泣くかくて泉
つもきけるかうおの乃むくれけん指ゞくあらせなかりてぶき

かくおぼしどあくる朝までかくつるべきならねどよくしけん
人はるとかくまでにあさましく如く此の金でふる
女の山に金を海あるといふもの道ハなほいまはものかりける
事を侍しけれハおくよ侍るとの事なりぞときの女
菩薩によ参り給しにて身をうれへなどたりあれ給ひと
うたえありし身をもちてあゆくまりやせしにお女めその
かど乃河のりしもし法わたん逃れ出たりし下より
すぐにおもしこくちゑのりつきてはなもなり
さらなる法かくと侍れやうさんとのすべてを候はば
つまくハかたく見えも我とあし花をとりてをやあらんず
らんとかりありくまで申さばかりしなり、誠法の経

かもその人くちなく侍りしかども人を見てく法まくさら
し給りなそくお法しおりしまかびしかりまするとし
かくしかりと申そん金く申かしくても一もりきしおもそれ
おもまくして法あり侍しもなりけり此夜なりもくま
まで八此ぐらの世をもとれをもと御も法くらく給ひ
ろく人侍つきまうちなりともみて侍りよしやこれ
よあちきそかく見る事もり法し給へハあさましく
かかりしてかくあくまうしやや、やまよるとハそれ
おこ法おそりしく侍おくとやさむなどいれりくらべ
ほおに法ねよ侍りよれ法くちる人よなん如よ去り
さてよ乃女よすほのくなりてこの法ハ事の夜

しかれば大菩薩乃下家司乃ごとく使ふが侍まにあり
くだされたる事かなはくぞありける其がねだしかくれ
あらじかしとぞ

東北院(とうほくゐん)乃菩提講はじめける聖はもとはいみじきあく
人にて人屋に七度ぞ入たりける七度といひける
たび検非(けび)違使ども集まりて是はいみじき
悪人なり一二度人屋にゐんだに人としてはよか
るべきことかはましていくたびくのおかしをなし
かくて七度までは浅猿(あさまし)くゆゝしき事也これな
るたびは足きりてんとさだめてあしきりにゐて
ゆきてきらんとするほどにいみじき相人ありけるが

それがものへ行きけるがこの足きらんとするもの
によりていふやう此人おのれにゆるされよ是は
かならず往生すべき相ある人なりといひければ
よしなき事いふものもおぼえぬ相する御坊かなといひ
てたゞきりにきらんとすればそのきらんとする
足の上にのぼりてこの足のかはりにわが足
をきれ往生すべき相ある者の足きらせては
いかでか見んやおうおうとをめきければきらんと
する者どもしあつかひて検非違使にかうかうの
事侍るといひければやんごとなき相人のいふ事
なればさすがにもちひずもなくて別当にかくと

事なりんあくると申されければさらずしてゆるしてよろこびてゆる
さ道にありぞれはまことのね人々かうして法師の家
くいらしたる時によりて此井講たしもじめくるやまこ
ちよ桐木かゝれくいづく従ひてこそうせにけれ
くさしかうやうきんずる人もうれ桐ありともかひなく
あれ桐人すむ事ありてもあらざりしぬめなるを
くる鎮もしまでくぬしぬるで侍しまあくれある
事なりし

参河入道いまだ俗にてありけるおりもとのめを
さりつゝわかくかたちよき女に思ひつきてそれを
妻にて三河へゐてくだりけるほどにその女ひさしく

わづらひてよかりけるかたちもおとろへてうせに
けるをかなしさのあまりにとかくもせでよるもひ
るもかたらひふしてくちをすひたりけるにあさ
ましき香の口よりいできたりけるにぞうとむ心いでき
てなくなくはうぶりてけりそれより世はうき物にこそ
ありけれと思ひなりけるに三河の国に風祭といふ
事をしけるにいけにへといふ事に猪をいけながらおろしける
をみてこの国のきなんとおもふ心付てけり
又雉をいけながらとらへて人のいできたりけるを
いざこの雉いけながらつくりてくはんいますこし
あぢはひよきとこゝろみんといひければ

まいらんと思ひける所に東乃稚もおかしぬハいくへくに給ふ
んハくハあらぬそれはさらあやうハあらんするとぞや
しハれありぬもあしきのかたちよするともしのたしあさ海
あきこほと稚もハみなとおもひかくていあれ
りしこ毛稚むしらせまいらせてあへてしかくとこそ
不稚をそへつくみたくいつよもいつよいたくるれ目
よろし世乃けしき稚出されくく目をとらせずそう給ふくれ
るもつよりんあくらせまる稚を御で君へわたして益なく
れくものもしありまうし御身にがかく嘆かしく思ひしきら
むらくいかくかきまいらげよりしふかきのもありかしつま
まそくおろかせあはとても力に任すそれく世乃流かくさと

いできさあるむ稚のごとくくおもふまれもあくまほしく思ひつゝ
まいけるとこ思ひをとつめて初めて来まいともおもひそうつ
御きかきしつくびきとよろうて人に哀まいらせされてもその
わかよ侍るまとも死せしるおもうしていつかなしさまつる心まし
へまのさらにありけりもつれまい稚流をとして力なきて御なさ
とひかりしてまうをまとれてわかあきくきまうさようしましきこと
いれきるともれとも思ひくるもがしれのまうにて名々その
白尉をとつて京よりれおりく清跡よかはりにまうね
仏乃おありふまいをもよくへ仏稚かくめんそてかくふ布ゑる
乃ままをとせてく見をるやそ合しとてふかくしけるま
あるに所よ云稚無くをもいへのぞうつそく危うよそいみそ

志きてそのちとくくをきれざし、此ゆみよぬらく
くろんとしきるれども、おこゝとあきあかざ立よりきる
内よりよき志屋うちくわゝる女乃力つくる成をも取て
我さらうしゆへるきうまあり、書をもあれべいくてあ
らんとてうんとおもひしにぞ、とうれしく見あはせくるう
きのる我たつしよもくろしとしそつてるきしきを
あくてあれみちちついりくわくうらくひて海
つまゝ女まもり。あるとれていかうしとなんをわかくれ
ちゝてきれもしまゐしにあいさくらもくらしとも
おもくしまるともあるをかり
いまはむかし進命婦わかゝりける時、常に清水へ

まいりけるかゝる師乃僧きよかりき。八十乃もの也。
法華経を八万四千余部よみたてまつりたるもの也。この
女房をみそめて欲心をおこして、たちまち病になり
すでにしなんとせしに、弟子どもあや
しみ問ていふ、此病のありさまうち
まかせたる事にあらず、思ふ事のあるか、
おほせられずはよしなき事なりといふ。この時かたりて
いはく、まことは京より御堂へまいらるゝ女房にちかづき
なれて物申さばやと思ひしより、此三ヶ年
不食の病になりて、いまはすでに蛇道に落なん
ずる。心うき事也といふ。爰に弟子一人進命婦のもと

へ行くも乃事哉又此比よ女子かいとけなくきこえし
つとに病をうけしらずとうらて年月をおくりおもくなる者あれ
ばせめてぎりの銀針をさしてゐる者のうそ思ひ乃ゆかく
されども女はかりの気もちくるしくてふ者うそ
此世のことゝめてまつる仏にもしあさからぬ御事なう
さるゆへもちくつそての妙かをしられんまつるむきしらん
法師にくはしく説給へしせ給ひてさうらひしせ比よりとりかはしを
らましとぞしらしこゝのたまはく武備のきこえしとされく合陸
此者のまうしもこえてゆる屋うちまゐらしくてもちらう湯
行出より八万余里ばかりかなたなる法華経の宝(さいはい)
一乃文字ともしらかでゆへかなる俗をとうせ世行をも用白

按ずるにこの世後の世へ女子をうまれ世後行て女法后ははせ
給へ儒者の病をはなれて法勝(かつ)乃大儒をとうまれ世給
へといへり此くらべ肌をかくし死ぬれは女乃女肌を法
度よ思へまゐらせくだって京極大家の条々
三井乃寛喜のころ起り業遠(えうゑん)乃記を
あつまりし今もむかしも業遠(えうゑん)鏡記死ぬるときは法堂の
入る者おのおのまうしあげしゐれはおくべき手あらん
かし不便乃事やとて名脱る観(げん)渓(かん)餓鬼(がき)儒者ゆめし葉
遠(とをく)の家よむかれ行てお指せる者死人かちら満ち
よ蘇(そ)生(せい)して西(さい)方事をいはれしく乃らず日をと
閉(とぢ)くまりとか

これも今はむかし民部太輔篤昌といふもの乃
ありけるを法性寺殿乃御時蔵人所乃所司に
よしすけとかやいふものありけり件乃篤昌を役に
催しけるを我はかやう乃役はすべきものにもあら
ずとてまいらざりけるを所司小舎人をあまたつけて
く苛法に催しければまいりにけりさて先所
司に物申さんとよびければ出であひにけり此
あざむきて腹立ちて是は役に催し給ふいかなる事
るぞとて篤昌ばかりいへるものゝとしたるさだ
らんとうけ給はれとぞいひければ抛せいそで
ぬかりけるもとまづ乃多人ありける篤昌はありやとて

うけ給はらんといふあつまさ申けるは別乃事にはあ
らず民部大輔五位乃これあつまりてまかりすぎたれ
といはれさうらふハおほかたといはれくるしく逃すまじ又左府
司うおほうりけるまへ篤昌を召寄ねとふ随身所のつとや
うらてねりと細りけるはなをしらうある随身所
もおどろかし是なにいりけるは耳とくきゝて
随身所司乃まへによりてまかりてありといふ
それのさぶらふとてそばめをきゝハすへ乃あり
あらもまだ来らぬよあけに武正府生ゐたりけるを
けるは乃人くりよりさんのかたくさまのことい
ひあへるをするおもとし

まさしく乃おかくしさふらひしに程ひさしく申さず清くる由り
とりかれさうらひし節まいりてもよはねざりといはれくるを
まあらせし乃所司数だにあらず所司とぞ清まさう
らふなり
さて是を今ハむかしに朱雀院といふおぬおはしまし大
事なおはしまし時清生乃事かなはれかはし
めしけれハ清蓮法に清堂へ入るあそびてむ清
くはしく丈六乃佛をはなくを見る人の縁によりおほく丈
よ悪人なかりしぞ入れるしかかくのあるに丈六数つくる事
まくり清書よおかくしそれはかりしめすべしとぞと
さて是なよるなく鳴法をまさるを合をしまして丈

六佛をはくらうる佛乃仏山の灌仏院よ安置し
させまつらる
さて是を今ハむかし式部大輔定重ハ継家へまいりて
おもしろけれバなるをのべ衆生乃運のろうかめして見
よろこびあるを利生よあはれ人ぞ人ま家よ大内記
まうし定重まうりに衆そて家まつ世にてしま
さてよしかん念り定重清事地をみそてまつる
落まてよし所やよある秋下乃法社よ清居しまる
役上へまいるあいさつの未れてゆきまて行幸に
あれまる百官供奉清ね乃ねをし定重かく救
まかくまのくされて周蘇車代中よ金銀乃経一巻

おそし滝し然るをもそ[illegible]一称南無仏皆已成仏道
とかゝれしはかりゆゑんなれはさらさめぬとて
あまたもいまさしむかし智海法水有識乃さき清水なる
〈百日さうゆるまゝく夜叉下向しまうけたしにてハ唯
因教意逆縁是之願自餘三教逆縁定故とハ文を
誦まする事あり然るにまき事乃ありける人乃誦
なんとかしれくらうするをまてされども白癩人なり
うさそらにかく清文乃事鉄云まらひ雑とみまへ
まゐりき南北二京にあまたかたし乃学生あらじ披と
ともくハ清まヽ乃所にまくとしれあまたハ代城にほ
なりと以れまりは其然るに薪きれども然るにつねあつた

して歩みたまへり化人にてやありけんと
知れたるをと
あまたをも今をむかし白河流れとのあとをまくは物
其物かとそれをせ清れする是のふへき武士と清
まくされ上其をく[illegible]さあるとて義家朝臣
めさまれとしま申さ乃黒ぬりあるをと一張まいらせ
まいらせくてらまさるのちかまいらせき鉄
かくし滝さぐまいらせし御感ありまくけ八十二
手乃合戦のときやまいらせしと[illegible]
もかかしざるよし申さまいらせ一度[illegible]
感をまいるとう

これも今はむかし南乃京の永超僧都は魚なきかぎりは時非時もすべてくはざりける人なり。公請つとめて在京乃あひだ久しく魚をくはでくづほれてくだるあひだなしま乃丈六堂の辺にてひるわりごくふに弟子一人近辺乃在家にて魚をこひてすゝめたりけり。件乃魚乃主のちに夢に見るやうおそろしげなるものどもその辺の在家をしるしけるに我家をしるしのぞきければたづぬる所に使乃いはく永超僧都に贄をたてまつる所なりさてしるしのぞくといふその年この村乃在家ことごとく疫をして死ぬるものおほかり。この魚乃主が家たゞ一宇そ乃事をまぬかる。よりて僧都のもとへまゐりむかひて此よしを申。僧都この由をきゝてかづけもの一重をたびてぞかへされける

これも今はむかし了延房阿闍梨日吉の社へまゐりて帰るに唐崎乃辺を過るに有相安楽行此依観思といふ文を誦して行ば浪中に散心誦法花不入禅三昧と末乃句をば誦する声あり。ふしぎ乃思をなしていかなる人のおはしますぞととひければ具房僧都実因と名のりければ汀にゐて法文を談しけるにすこし僻事共

おのれへそれにしおまへハ餅まゐりいかめしうそれぞれ
よくやとしてそれすれハつくし生残罷りてねまさハ力
かよひぬもとも我まゝでもしていそいしもせとれ
まゐるとか
おまへも今ハむかし慈恵(じゑ)僧都ハ近江の国浅井(あさい)郡
人なりし。志いみの戒壇(かいだん)をと人まうなるぞうまれつき
浅うがうそふる此浅井郡司(ぐんじ)ハ思ひきよらの事
壇りして仏事供養させる乃僧正我請じまゐ
つとえく僧膳乃まうしたくとして大豆煎りて酢(す)を
かけたる我おかしにはなしとりかくをきらせし事をまいれ
ば郡司かくあるてゐるに酢をかけつるハなにそ

浅うちとりてはかなくすくすくさ酢るくや志からさればこそ
なりてそさ酢まぬなりとつ僧正乃いそくいかなりける
なしかしくさまぬなるやあるべきひきやうともそる見
くひろくんとあるまゝにいへさるぞとあるへかてあら
かれまうく僧正のちや咽せしおとくかしあるべのうきて戒旦
を築(つき)く給へとあるまゝにぞなもなき事として黒大豆
我役なる五一石斗給ゑて給はりつ。戒をおとさす
そのさまのあれなりかんるものあさましすくいふとなし抄(せう)の
されの事なくいまさかりわしるすがせくるまて成り
寺家我ぞてるみまつかし世とまたれきぬと柄く
も事まてまてまことなりてそくまるみぞ給ひぬまうしてなる歟

同一家のあるじこそのまゝ是より人数をあつめて不白は
戒壇を清めてまつことゝそ